

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	語りに伴うジェスチャーが会話の場にもたらす影響についての考察 : 語りによる出来事の再現と図像的ジェスチャー
Author(s)	名塩, 征史
Citation	広島大学森戸国際高等教育学院紀要 , 3 : 14 - 27
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50729
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050729
Right	
Relation	



語りに伴うジェスチャーが会話の場にもたらす影響についての一

考察：語りによる出来事の再現と図像的ジェスチャー

名塩 征史

An Examination of Narrative Gestures in Conversation: A Multimodal Re-Enactment Including Iconic Gestures

Seiji Nashio

The purpose of this paper is to analyze a conversation of four Japanese women and examine the multimodal narration with iconic gestures in which they physically re-enact the narrated activity. The analysis shows that these gestures set up an imaginary stage for the re-enactment in their current conversation space, stimulate a recipient to co-act with the narrator, and help her physically experience what the narrator wants to tell. Based on these findings, the utterances and gestures were confirmed to independently express different parts of the same narrated event, indicating that the gestures' potency in conversation should be reconsidered based on the fact that gestures are always observable and entrusted to all recipients, facilitating a variety of forms of active cooperation.

Key words: multimodal re-enactment, iconic gesture, narration, conversation

1. はじめに

行為を含む様々な出来事の意味は他の事象やその場の環境をコンテキスト化することでより明確なものとなる (Silverstein, 1993)。Goodwin によれば、個々の行為は先行する行為連鎖 (sequence of actions) やその時その場の状況を指標とし、そこに埋め込まれることで「それが何をしていることになるのか」、その意味機能を明確にできるとされる (Goodwin, 2002)。また J. L. Mey による語用実践行為理論では、その時その場の環境がそこで何をすべきか、何ができるかを予め制限しており、我々はその場の環境によって限界づけられた中で可能な言語使用を目的や意図に即して選択し、実践しているものとされる (Mey, 2001)。行為はより大きな行為の中に埋め込まれ、また環境もより大きな環境の中に埋め込まれているという「入れ子構造 (nesting)」を想定する議論は少なくない (Gibson, 1979/1986; 鈴木, 2001; Goodwin & Goodwin, 2004)。個々の行為はその場に並置される他の事物事象や周囲の環境との間で相互特定のに関連づけられることで適切に意味づけられるものと考えられる

(佐藤,2006)。しかし、我々はその時その場から時空間的に距離のある未来や過去の出来事を想像・想起し、それに対する思考や評価を伝達する場合もある。その場合の出来事もまた、いくつもの小さな事物事象から成り、それらはある環境の中に埋め込まれ、相互に関連づけられている。従ってそうした未来や過去の出来事を表現・再現する際には、個々の事物事象を含み込む環境をまるごとその場に創出する必要があるだろう。我々は日常的な会話活動の中でそうした仮想環境をどのように創出し、未来や過去の出来事を現在の場に表現・再現するのだろうか。

本稿では、そうした仮想環境の効率的な創出に、語りに伴うジェスチャーが寄与しているものと考え、自己の身体の動きと配置によって仮想環境を創出する具体的な活動の様相を分析・記述する。語り手の思考や評価を伝達する上でその対象となる事象（群）がどのように表現・再現されるのか。本稿では、その表現・再現におけるジェスチャーの有用性と、その効果の発揮に必要な条件について一考を加える。

2. 語りに伴うジェスチャー

2.1 表象的ジェスチャー

「ジェスチャー (gesture)」とは、何かを伝えようという意図のもとに起こる行為の一環として発現し、伝えるべき内容に関連のある情報を表す身体の動きである (喜多,2000)。ジェスチャー研究は、心理学、人類学、社会学、行動学など複数の学問分野の潮流に位置づけられ、各観点から様々な定義、分類、問題提起が行われてきた (Ekman & Friesen, 1969; Kendon, 1986; McNeill, 1992; 2000; 菅原, 1996)。

ジェスチャーは言語 (発話) との関連で議論されることが多い。たとえば、両者の連鎖構造の関係性を論じるものが挙げられ、話者のジェスチャー連鎖の時間構造を話者自身の発話連鎖と関連づけるもの (Kendon, 2004; McNeill, 2006)、さらには現話者から次話者への発話連鎖に関連づける試みも見受けられる (細馬, 2009)。心理学的な観点からは、あるストーリーを伝達行為 (発話+ジェスチャー) へと移行する話者の思考との関連からジェスチャーが論じられ (McNeill, 1992; 2000; 喜多, 2000)、これは本研究においても特に注目すべき議論である。

一般的に、ジェスチャーの分類は、①身振りの使用がもたらす社会的作用、②受け手志向性、③形と機能の関係という3つの要因を軸に行われる (Ekman & Friesen, 1969; McNeill, 1992; 喜多, 2002)。本稿で扱うジェスチャーは、「形と意味の関係に自由度がまだ残されており、表現内容に応じてその場その場で形を変えて使うことができるもの」とされる「表象的ジェスチャー」であり、形と意味の関係が社会的慣習として完全に定まっておらず、発話に伴い自然と繰り出される「自発的ジェスチャー」の下位に位置づけられる (喜多, 2002)。つまり、表象的ジェスチャーとは、その使用がもたらす作用の社会性が低く (①)、

その形と機能との関係が状況依存的に決定される (③) ということになる。以降、本稿におけるジェスチャーは表象的ジェスチャーを指すものとする。ただし、表象的ジェスチャーの受け手志向性 (②) については、近年でも一部見解が分かれるところがある。たとえば、「これ・それ・あれ」などの指示詞と共起する直示的なジェスチャーで受け手の注意がある事物や方向へと導く場合や、「このような・こんな感じの」などの発話に伴い指先で空間に図像を描く描写的なジェスチャーによってある事物の形を示す場合などは、そこに明らかな受け手志向性を見て取ることができる。しかし、こうした直示的／描写的ジェスチャーは独り言や電話口での発話に伴って生起することも知られており、受け手不在、もしくは受け手の知覚が及ばない場面においても何らかの役割を担い得ることが予測される。後述するが、本稿で扱う事例も、一見ジェスチャーの受け手志向性を立証するかのようであるが、語り手が自分の体験や思考を語りやすく構成しようとする認知的な手続きに関連しているような側面も見受けられた。

さらに、喜多 (2002) では、表象的ジェスチャーと発話の内容との関係についての主な仮説として次の3つが挙げられている。第一に、表現したい情報を言語化した後で、選択された単語の意味表象に基づきジェスチャーの生成が行われるとする「単語意味仮説」、第二に、ジェスチャーの生成が、言語表現の可能性とは無関係にイメージ化した心的表象に基づき行われるとする「自由イメージ仮説」、そして第三に、表現したい空間的・運動的イメージをできるだけ言語化しやすいように言語表現可能性を考慮しつつ加工した心的表象に基づいてジェスチャーが生成されるとする「インターフェース仮説」である (喜多, 2002)。本稿における事例研究は、上記第三の仮説、すなわちインターフェース仮説に依拠し、それを支持するものである。

2.2 成長点理論と図像的ジェスチャー

発話に伴うジェスチャーの志向性を論じる上で重要な理論の一つに、McNeill による「成長点理論」が挙げられる (McNeil, 1992; 2000)。本研究の特徴を説明する上でも基盤となる理論であるため、ここで概観しておきたい。

McNeill は、発話とジェスチャーの共同において「成長点 (Growth Point)」という心的単位を設定した。成長点とは、ある事象を言語化する思考過程において、その事象のある側面がジェスチャーによって別途表されるに値するものとして区別され、ジェスチャーが発話から独立した表現形式として展開 (成長) していく起点／基点である。ジェスチャーが表すのはイメージ的側面 (imagery) であり、ジェスチャーの様相との類似性や直示性をもとに関連づけられる事象の動き／配置を含む側面であるとされる (喜多, 2000; McNeil, 1992; 2000)。たとえば、「虫がどこかへ行っちゃった」という発話に伴い、発話者の右手が何かを振り払うかのように素早く右肩より外側に向けて動いたとしよう。この場合、発話

は単に「虫がいなくなった」ことだけを伝えており、その際の「移動」がどのような動きだったかは伝えていない。その「移動」の跳ね上がり、飛び去るような動きや方向は、イメージ的側面として描写的なジェスチャーに引き継がれ、表出することになるのである。

McNeill (2000)によれば、ジェスチャーは話者による事象の「再概念化(reconceptualizing)」を反映して産出される。この再概念化はあくまで情報の言語化に伴う思考(verbally engaged thinking)であり、ジェスチャーの表出は情報の言語化を前提としている(McNeill, 2000)。この点で、成長点理論がジェスチャーに関する「自由イメージ仮説」を否定するものであることがわかる。一方で、ジェスチャーは発話の「翻訳」ではない。つまり、ジェスチャーは発話によって表現されたものを動きによって再現するものではない。上に挙げた「虫の移動」のように、ジェスチャーが表出する動き(ある行為の様相)は、共起する発話が伝えきれない情報のイメージ的側面である。伝達すべき事象は同じであるため、発話と身振りとの間で表現する情報に度々重複が見られるものの、両者は互いに独立した表現形式として捉えられる。したがって、成長点理論は、身振りに関する「単語意味仮説」をも否定し、残る「インターフェース仮説」を支持する理論であることが確認できる。

McNeillの成長点理論によれば、ジェスチャーによって表現されるのは、話者に固有で具体的なイメージの側面である(喜多, 2000)。この具体的なイメージは、当然再概念化される事象との間に類似性や直示性を有する具体的なジェスチャーとなって表出することになる。こうしたジェスチャーを特に「図像的ジェスチャー(iconic gesture)」と呼ぶ。図像的ジェスチャーの研究はこれまでも盛んに行われてきたが、その多くが、直前に見た人/物の配置や短編アニメの内容(McNeill, 2000; Holler & Beattie, 2002; 2003; 古山・関根, 2008)、または現在地から近いある場所への行き方など(喜多, 2002)、そもそもその動きや空間的な配置が直前に具体的なイメージとして観察されたか、もしくはイメージ的に表現しやすい事物事象を刺激として与える実験手法を採用している。しかし、本稿が用いる会話事例のように、予め伝えるべき情報を指定していない場合でも、記憶された出来事や想像上の出来事を具体的なジェスチャーによって描写し、表現することも可能である。いずれにしても図像的ジェスチャーの使用にとって重要なのは、発話者が、その時表現しようとする事物事象を、実際にその場で直示・描写できるほどに具体的・典型的イメージを伴って把握しているかどうかであると考えられる。

3. 分析

3.1 語りのマルチモダリティと聞き手に与える影響

本稿では、図1のような環境下で、予め特定の課題や話題が与えられることなく開始された日本人女性4名(A-D)による会話をビデオカメラで収録した。参与者4名の間には幾分の年齢差はあるものの、同じ大学院に所属し、専攻する分野も近いため、普段から交

流のある親しい間柄である。調査者（本稿の筆者）から参与者に与えられた指示は「一時間を楽しく過ごす」といったものだけで、その他参与者の言動に対する特別な制限は加えられていない。ビデオカメラは一定のアングルに固定され、収録開始とともに調査者は退室した。したがって、収録中に調査者から参与者に対して指示が与えられることもなかった。

下の【断片】は、4名の会話が友人や親族の結婚式の話となり、やや婚期を過ぎてしまってから他人の結婚式に参加する女性の心境に触れ、それに関連し、参与者Dが「ブーケトスというセレモニーがどれだけ酷なものか」について語っている場面である。

【断片】

- 01 D: あれ[だよねー, なんかブーケトスってさあ,
 02 A: [(手を叩いて笑い出す)
 03 D: 酷なーい[儀式だよねー
 04 A: [こんななって@@
 05 D: だってさあ, 飛んできててもさあ, なんか, こやってCちゃんとか
図2 図3
 06 [こやっていてさー,
 07 C: [@@
 08 D: なんか, 次絶対行きたーい[みたいな。
図4
 09 A: [@@@
 10 C: [@@@ (手を叩きながら)
 11 D: すごいさあ, 奪えないじゃん
図5
 12 取ろうと, 取ろうと思えば取れるけど, なんか,
 13 A: 押し倒してね [@@@
 14 D: [なんか, なんか, こうやってここに来るんだったらいいけどさー
図6 図7
 15 A: [@うん
 16 C: [@はい
 17 D: なんかこ, この辺に来た場合さ,
図8
 18 C: おうおおつ
図9
 19 D: なんか, お, 落ちたあ, みたいな
 20 A: [@@@
 21 C: [@@@
 22 D: どうすればいいの?

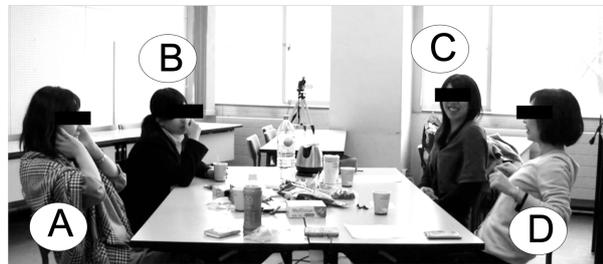


図1：会話環境

01-04 行目は、Dの語りの序論部分と言えるだろう。01、03行目の発話でこれ以降の一連の語りでDが特に伝えたいこと（「ブーケトスは酷な儀式である」）が簡潔に述べられ、

続く語りの展開を他の参加者に予期させるものとなっている。このDの語り出しは、先行する会話の内容から同じような心境に至っていたと思われるAの積極的な振る舞い（02、04行目）との掛け合いによって際立ち、自ら語り手となって他の参加者を聞き手に配する枠組みの設定に成功している。続く05行目「だってさあ、とんできてさあ、」という発話とともに、Dは左手を前上方へと掲げ、その手に自己の視線を宛てる。これによってDはブーケの出处を自己の前上方に設定し、同時に自己がブーケを受け取る主体であることを表明している（図2）。さらに、同じく05行目の「こやって」という発話と同時に、Dは右隣に座っているCに右手で軽く触れ（図3）、その直後の08行目では自己の上体を右側へと傾け、Cの前方にかかるまで勢いよく右手を伸ばした（図4）。ここまでのDの一連の振る舞いによって、ABとCDがテーブルを間に向かい合って座る会話の場に、ブーケトスの仮想環境が設定されることになる。実際には存在しないブーケを指し示し、視線を宛て、待ち構える仕草を伴うマルチモーダルなDの語りは、実際のブーケトスとその場に再現しつつ進められている。しかも、この仮設されたブーケトスの環境は、決してDの意識する限りに収まるものではない。そのように演じるDの振る舞いとその場をブーケトスに必要な空間として捉え直すことを周囲に促している。

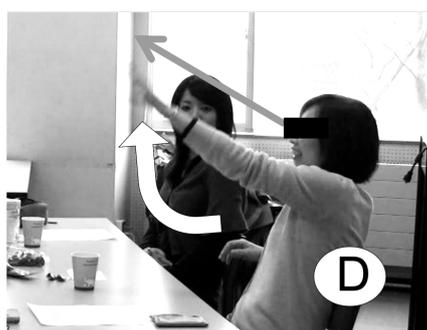


図2：05行目(前)



図3：05行目(後)



図4：08行目



図5：11行目

続けて、図4の振る舞いとほぼ同じ振る舞いが11行目（図5）でも繰り返されることにより、ブーケの落下地点がCの前にまで及ぶ可能性が再び示唆される。この時点でCは、少なくともDの想定の中では、ブーケを受け取る側に配置されており、語りとともに演じ

られるブーケトスの場面に登場する人物として位置付けられた。これは 05-06 行目の「こやって C ちゃんとかこやっていてさー」（図 3）という発話により、あえて C の所在を再確認する振る舞いからも伺うことができるだろう。



図 6 : 14 行目(前)



図 7 : 14 行目(後)



図 8 : 17 行目



図 9 : 18 行目

注目すべきは、その後の 14-22 行目までの DC 間のやり取りである。14 行目の「なんか、なんか」という発話とともに、D は再び前上方を見上げてブーケの出処を見定め（図 6）、そこから視線を自分の胸の前まで下ろし、「こやってここに」（14 行目）と言いながら、視線の先に掌を上にした両手を並べた（図 7）。これはまさに上空から弧を描いて落下してきたブーケを胸の前で受け取る行為の再現であることがわかる。さらに 17 行目で D は、「なんかこの辺にきた場合」と言いながら、自己の視線と左手を隣に座る C との間に動かした（図 8）。すると C は、18 行目で驚いたように声を上げて目を丸くし、困惑しているかのような仕草を見せた（図 9）。この C の反応は、直前で D が左手を二人の間に持ってくるジェスチャー、すなわち、落下してきたブーケに対する反応であることがわかる。つまり C はこの時、自己をブーケを受け取る主体として捉え直し、D が演じるブーケトスの仮想環境の中で、ブーケを巡って D と競合する者を演じているのである。ここまでの一連の語りの中で、D が C に対して明確に共演を求めるようなことはなかった。しかし C は、自己の周辺

をも射程に捉えながらブーケトスを再現しようとする D のマルチモーダルな語りの中で、自然と自己をその再現される出来事の中に投影し、必要な登場人物を演じるに至っている。最終的に 22 行目で D が「どうすればいいの」と発話した通り、ここまでの一連の語りの中で D が伝えたかったのは、自分が受け取るべきかどうかの判断が難しい位置にブーケが落ちてきた際の「困惑／とまどい」（すなわち、これがブーケトスの酷な一面）である。しかし、この 22 行目の言表を待たずに、C は D のマルチモーダルな語りを通して、すでにその「困惑／とまどい」を体感していたことが 18 行目の振る舞いからわかる。

3.2 会話の場の変容：ブーケトスの枠組みの創出

当該の場面において、D のマルチモーダルな語りに、聞き手である C を自然と協同させるまでの臨場感が備わるには、それまでは単なる「聞き手-話し手」という枠組みを基盤として組織されていた会話の場に、「ブーケトス」という活動の枠組みが（仮にでも）創出される必要がある。もちろん、実際にはその場は結婚式場ではない。新郎新婦や他の参列者もいなければ、ブーケも存在しない。そうした「今ここ」の会話の場にブーケトスの枠組みが創出されるまでの過程をもう一度見てみよう。

【断片】01-04 行目の語り出しは、当該の会話の場を二分する手続きのように見受けられる。すなわち、図 1 の左側（AB 側）と右側（CD 側）を、いわば「観客席」と「舞台」に分ける分岐点となっている。01-04 行目の段階では、A も D と競合するほど際

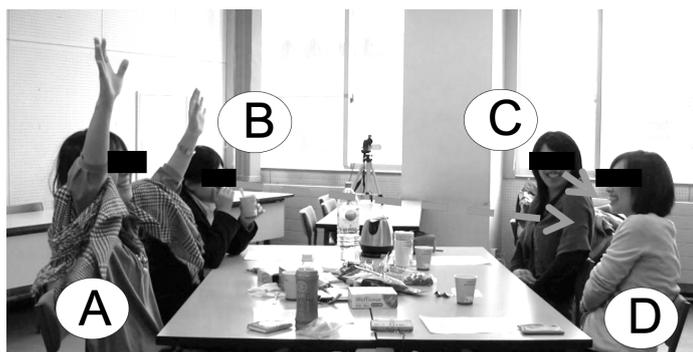


図 10 : 04 行目

立つ振る舞い／ジェスチャーをもって積極的に語りに参加しようとしているが（図 10）、最終的には D（と C）の方へと語りの舞台が固定される。語りへの積極性でその場を二分するなら、A と D が協同する可能性も考えられるが、その場の 4 人の配置から考えると、テーブルを挟んで向かい合うという物理的な距離が、二人の協同の障害となることは間違いない。また、04 行目（図 10）の時点で、B と C の視線がすでに D に向けられており、BC からは D が語り続けることへの期待が伺える。実際に 05 行目（図 3）で D は、ブーケを受け取る自己と競合するもう一人の受け手に C を指名した（ただし、C に何か行為を要請しているわけではない）。これにより、D の側に再現の舞台が固定され、さらに続く 08 行目（図 4）、11 行目（図 5）のジェスチャーによって、その舞台が C の周囲にまで及ぶことが示される。つまり、この時点ですでに C は、実際に共演するかどうかは別として（後述）、D が演じる舞台上に立たされたことになる。

ここまでの手続きによって、少なくとも語り手である D の想定においては、AB 側上空がブーケの出处、D 自身がブーケを受け取る主体、C がもう一人の受け取る主体というブーケトスの枠組みが仮設された。そして、この枠組みが C にも承認され、共有されていることが 18 行目 (図 9) の反応によって示されることになる。C は D と同じ舞台上で並び立つ共演者として、17 行目 (図 8) で D が指し示した位置を、「D の右側」ではなく、「自己 (C) と D の間」として認識した。その位置に落ちてきたブーケは、共演する二人のどちらにとっても手を伸ばしうるものとなるため、両者は自ずとそこで「自分が受け取るか、相手に譲るか」の選択に迫られる。実際に、C は 18 行目でその選択に直面し、それに伴う「困惑／とまどい」を発話と身体によって表出している。D による一連の図像的ジェスチャーや視線配布によってブーケトスの枠組みとなるヒトとモノの配置が示されることで、その臨場感が C にも伝播し、C は自らその枠組みの構成要素の一つとなった。その C による自己の捉え直しが、D の語りにもさらなる臨場感と演劇性を付与していると言えるだろう。

4. 考察

4.1 発話とジェスチャーのインターフェース

2 節で言及した「インタフェース仮説」および「成長点理論」に基づき、本稿での事例分析から明らかとなった発話とジェスチャーのインターフェースについて考察してみよう。

まず、D の一連の語りの中で重要な役割を果たす図像的ジェスチャー (図 2-9) に伴う発話を見てみると、頻繁に直示表現 (コ系表現) が用いられているのがわかる (こ (う) やって／ここ／この辺)。これらが指し示す対象は、同時に繰り出される D のジェスチャー (もしくはその宛先) である。前節での分析で確認した通り、これらのジェスチャーはブーケの所在や落下の様子、それを受け取る者の所在や受け取る動きを表現するものであった。換言すれば、D の語りの大部分は、ジェスチャーによってブーケトスの様相とその周囲の環境を描き出し、それに伴う発話によってその描写を「見よ」と他の参与者に促しているのである。

一方、図 3 のジェスチャーに伴う 08 行目の発話「次絶対行きたーい」は、ブーケを受け取る主体の心境を吐露するものである。ここで D が表現したかったのは、「なんとかブーケを奪い取って次の花嫁になりたい」という受け取る主体の強い願望であり、08 行目の発話はその心境を明示している。しかし、それに伴うジェスチャーも、同じ心境を身体的動作で示していると言えるだろう。図 3 のジェスチャーで D は、その直前に隣り合うもう一人の主体として指名した C を押し除けるように体を右側へと伸ばし、無理な体勢でもなんとかブーケを掴み取ろうとする行為を演じている。この誇張された受け取る演技からも、受け取る主体がどれだけブーケを欲しているかが十分に伝わってくる。つまり、ここでの発話とジェスチャーは、「絶対にブーケを手に入りたい／次の花嫁になりたい」という 1 つ

の心境を明示化する、互いに独立した表現様式（モード）であるということがわかる。

このように、Dの発話とジェスチャーはそれぞれ異なる表現様式でありながら互いに協調し、ブーケトスの酷な一面を語っている。ある局面では発話が聞き手の注意を引きつけ、ジェスチャーがその場を枠づける。またある局面では一つの心境を発話が言語的に、ジェスチャーが身体的に明示する。発話とジェスチャーは決して互いの翻訳ではないが、その時その場に必要とされることや、その時その場で強調すべきことを接点に連携し、一連の語りを作り上げていると言えるだろう。

4.2 ジェスチャーの志向性

ジェスチャーの志向性は、他者志向か自己志向か、すなわちそれが誰に宛てられているか（誰のために繰り出されたか）を考慮して記述される傾向にある。本稿ではそうした傾向を踏まえつつも、ジェスチャーがその場の参加者全員にとって観察／利用可能な一現象であるという素朴な事実に着目する。その上で、本稿での分析結果を Clark & Carlson (1982) による“informative”、そして岡田 (2002; 2008) による「投機的な行為」といった概念を援用し、ジェスチャーの志向性をその観察／利用可能性という観点から再考してみたい。

Clark & Carlson (1982) のよれば、話し手が、ある聞き手に宛てた発話によって何らかの行為（発語内行為 (illocutionary act)）を遂行しようとするとき、その発話行為は、宛先となる聞き手以外の全ての参加者に対して、その発話行為にかかる何らかの情報を同時に発信することになる。このような発話行為が周囲の参加者に対して発揮する効力を *informative* と呼ぶ (ibid.)。たとえば、XがYに対して、「どうぞお座りください」と椅子に座るように進めたとしよう。この場合の発語内行為は「Yに着席を勧める／指示する」ということであり、聞き手であるYには勧められるままに椅子に座ることが期待される。しかし、もしその場にもう一人の聞き手Zがいて、そのXのYに対する発話を聞いていたとしよう。そしてさらに、その発話を受けてZが少し離れた場所にあった椅子をYの近くまで持ってきたとしよう。XがYに宛てた発話行為「どうぞお座りください」にZに対する指示は見受けられないが、その発話行為が為された状況を目の当たりにしたZは、その周囲において何をすべきかに気づき、主体的に行動を起こしたことになる。つまり、発話行為には、発語内行為の遂行と同時に、その遂行の意思を広く周囲に発信することで、宛先となる聞き手以外の聞き手に対してもその状況に適した然るべき行為を要求する *informative* を備えているのである。

この *informative* が示唆する発話行為の重要な側面は、宛先となる聞き手以外の聞き手にとっても発話行為は観察可能で、その周囲の全ての参加者に対して何らかの効力を発揮するという点だろう。これは発話に限らず、ジェスチャーを含むあらゆる伝達行為について同じことが言える。本稿の【断片】の中で分析したDによる一連のジェスチャーも、

ブーケトスをその場に再現すると同時に、周囲に対してその意思を伝え、その再現に適した環境の創出／維持を他の3人に意識させることになるだろう。現状の配置やDのジェスチャーの及ぶ範囲を確認することで、AとBは聞き手としての役割に徹し、逆にDのジェスチャーと接触するほどの近い位置にいることを自覚したCは、Dとの共演に踏み切ることになる。Dによる一連の図像的なジェスチャーもまたその場の参与者全員から観察可能であり、各々の置かれた状況に応じた振る舞いの調整に広く影響を及ぼしていると言える。

ただし、繰り出されたジェスチャーが周囲に発揮する効力が、全て語り手の意図に沿うものであるとは限らないし、その必要もない。そもそも全てのジェスチャーが他者に何かを期待して繰り出されたものとは限らない。ジェスチャーの志向性、すなわちその観察／利用可能性は、語り手の意図とは無関係に常に備わっているが、実際にそれを観察／利用する他者がいなければ発揮されることもない。逆にジェスチャーが他者から観察可能である限りは、実際には期待していない反応が他者から返ってくることも十分に考えられる。岡田(2002; 2008)によれば、我々は普段の何気ない行為の意味や役割を、自分自身では完結した形で与えられないままに行い、その意味や役割の付与が常に相手からの支えによって完結することを予定しつつ投機的に繰り出している。【断片】中のDのジェスチャーもまた、投機的な行為として他の参与者からの然るべき反応(少なくとも現行の語りを妨げないように振る舞うこと)を予定しつつ繰り出されていると考えられる。しかし、Dが誰に何を期待するのか、その具体的な予定は問題ではない。なぜなら、Dのジェスチャーは、Dの意図とは無関係に、常に他の3名から観察可能であり、各参与者が個々の状況を考慮してどのような反応を返すかは、各者の主体性に委ねられているからである。【断片】中で本稿が特に注目した17-18行目のDC間のやりとりは、Dが繰り出すジェスチャーの演劇性や臨場感の影響を受けつつも、結果的にはCの主体的な語りへの参加によって成立している。ブーケトスの酷な一面を象徴する「困惑・とまどい」を描き出す語りのクライマックスともいえるべき局面は、Dの図像的なジェスチャーを伴うマルチモーダルな語りがCの主体性を喚起し、両者によって相互主体的に共創されていると言えるだろう。

ジェスチャーの志向性は多くの場合、推察可能な範囲での語り手の意図を反映し、もしくは、ジェスチャーが為された場の状況(特に他者の存在)から、「自他」の判断が為されてきたように見受けられる。しかし、ジェスチャーが誰からも観察可能な形で投機的に繰り出された一つの行為であることを踏まえると、むしろその行為を目の前で起こった一つの出来事として捉える聞き手(受け手)の主体性こそが、当該のジェスチャーの志向性を測る／象る重要な指標であると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、日本人4名による会話の場で観察された図像的ジェスチャーを伴うマルチモ

一ダルの語りを観察・分析し、語り手の臨場感あふれる一連のジェスチャーが、実際の会話の場に、語る対象となる活動の場、すなわち語り手のジェスチャーがリアルな行為として認識される場を一時的に仮設することにも寄与していることを示した。また、そのジェスチャーの演劇性や臨場感が他の参加者の主体性を喚起し、身体的な共演を伴う語りの共創へとつながるプロセスについても一考を加えた。さらに成長点理論、informative、行為の投機性といった先行研究における知見を援用しながら本稿での分析結果を捉え直した。これにより、発話とジェスチャーが相互に独立した伝達様式として共同する両者のインターフェイスを確認し、周囲の参加者から常に観察可能な形で投機的に繰り出されるというジェスチャーの本質とそれによって喚起される他の参加者の主体性がジェスチャーの志向性を再考する上での鍵になることを示唆した。

ジェスチャー研究の歴史は長く、これまでに多種多様なアプローチによる分析や考察が行われている。そうした流れの中で本稿の事例研究は、ジェスチャーのほんのわずかな一面に考察を加えたに過ぎない。今後は他の様々なジェスチャーについても、相互行為の組織化に寄与するジェスチャー (gestures in interaction) としての一面を明らかにしていきたい。

参考文献

- Clark, H. H. and Carlson, T. B. (1982). Hearers and Speech Acts. *Language*, 58(2): pp. 332-373.
- Ekman, P. and Friesen, W. V. (1969). The Repertoire of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, Usage, and Coding. *Semiotica*, 1(1): 49-98.
- 古山宣洋・関根和生 (2008) 「忘却か？ 方略か？ —ナラティブ話者の一貫した言及回避の謎に迫る」 篠原和子・片岡邦好 (編) 『ことば・空間・身体』 ひつじ書房: pp. 17-35.
- Gibson, J. J. (1979/1986). *The ecological approach to visual perception*. Psychology Press. (古崎敬他訳 『生態学的視覚論』 サイエンス社 1985)
- Goodwin, C. (2002). Conversational Frameworks for the Accomplishment of Meaning in Aphasia. In C. Goodwin (ed.), *Conversation and Brain Damage*. Oxford and New York; Oxford University Press: pp. 90-116.
- Goodwin, C. and Goodwin, M.H. (2004). Participation. In Duranti, A. (ed.), *A companion to Linguistic Anthropology*. Blackwell: pp. 222-244.
- Holler, J. and Beattie, G. (2002). A Micro-analytic Investigation of How Iconic Gestures and Speech Represent Core Semantic Features in Talk. In *Semiotica* 142(1): pp. 31-69.
- Holler, J. and Beattie, G. (2003). How Iconic Gestures and Speech Interact in the Representation of Meaning: Are Both Aspects Really Integral to the Process? In *Semiotica* 146(1): pp. 81-116.
- 細馬宏通 (2005) 「修復を捉えなおす—参照枠の修復における発話とジェスチャーの個体

- 内・個体間相互作用—」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』ひつじ書房: pp. 123-158.
- 細馬宏通（2009）「話者交代を越えるジェスチャーの時間構造—隣接ペアの場合—」『認知科学』16(1): 91-102.
- Kendon, A. (1986). Some Reasons for Studying Gesture. *Semiotica*, 62(1): 3-28.
- Kendon, A. (2004). *Gesture: Visible Action as Utterance*. Cambridge University Press.
- 喜多壮太郎（2000）「ひとはなぜジェスチャーをするのか」『認知科学』7(1): 9-21.
- 喜多壮太郎（2002）『ジェスチャー：考えるからだ』金子書房.
- McNeill, D. (1992). *Hand and Mind: What Gestures Reveal about Thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeill, D. (2000). Growth Points, Catchments and Contexts. 『認知科学』7(1): 22-23.
- McNeill, D. (2006). Gesture, Gaze, and Ground. In S. Renals and S. Bengio (Eds.), *Machine Learning for Multimodal Interaction*. Springer: 1-14.
- Mey, J.L. (2001) *Pragmatics: An introduction*. Malden; Blackwell. (小山亘訳『批判的社会語用論入門—社会と文化の言語』三元社 2005)
- 岡田美智男（2002）「ロボットの内なる視点から「発達」を考える」『発達』95(23): 96-103.
- 岡田美智男（2008）「コミュニケーションに埋め込まれた身体性—ロボット研究からのアプローチ」『言語』37(6): 56-63.
- 佐藤由紀（2006）「一人芝居の身体—イッセー尾形の一分間—」佐々木正人編『アート／表現する身体：アフォーダンスの現場』東京大学出版会: pp. 55-74.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In John A. Lucy (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Pragmatics*. Cambridge University Press: pp. 33-58
- 菅原和孝（1996）「コミュニケーションとしての身体」菅原和孝・野村雅一（編）『コミュニケーションとしての身体』大修館書店: 9-38.
- 菅原和孝（1997）「会話における連関性の分岐—民族誌と相互行為理論のはざままで—」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社: pp. 213-246.
- 鈴木健太郎（2001）「行為の推移に存在する淀み—マイクロスリップ」佐々木正人・三嶋博之編『アフォーダンスと行為』金子書房: pp. 47-84.

付記：書き起こしの中で使用される表記凡例

[発話や非言語的な振る舞いの重なりが始まる時点
(斜体)	非言語的な振る舞いに関する筆者のメモ
,	発話が続く音声的な区切り（一秒未満の短いポーズを含む）
—	音の伸ばし（相対的に際立つ長さでない限りは1つで表記）
?	上昇調のイントネーション
@	笑い声